

人 生

掛川市遺族会 弓桁かね

父は昭和 18 年 5 月 16 日ニューブリテン島で戦病死、私が 2 歳の時でした。父の面会には祖父、母、叔父 2 人と私とで行きました。父の前で私が初めて歩いて父がすごく喜んだと母から聞きました。2 回面会に行きました。

そして 2 度目の父は、戦争から帰って来てオート三輪に乗れたので農協に勤めました。昭和 28 年 8 月死亡、妹が 2 歳の時でした。

母が幼い二人の子供を連れて「どうすればいい？」と母の実家へ泣いて来た時は、母の両親はかける言葉もなかったと聞いています。でも嫁いだ先の両親、家族の事を考えると出て行く事も出来ず家に戻りました。そして末の弟と一緒に家を守ってくれました。3 人の子供にも恵まれました。

母は自分の苦勞を私たちに話したことはありません。苦勞を苦勞とも思わずに明るく強く生きた人でした。「あんたのお母さんは苦勞した人だよ」と近所のおばさんに聞きました。百歳のお祝を大勢の人に祝ってもらって、元気にデイサービスに行っていました。1 年後に亡くなりました。子供、孫、曾孫にかこまれて後には幸せな人生だったと思います。主人と私も何度かお花見や温泉に連れて行ってあげました。車に乗るのが大好きな母でしたからとても喜んでいました。

現在の父は兄の子供だから粗末にできないと言っていたと母から聞きました。母にはもっと二人の父の事、母の人生を聞いておけばよかったと思います。

何もない時代、現在の父は大変だったと思いますが、私達を学校へ出し、お正月には新しい服を買ってくれました。父には感謝感謝です。

初めての父の私、2 度目の父の妹、今の父に 3 人の子供と、時々父の所へ行っては食事をして恩返しをしている所です。 終

平和を祈る

掛川市遺族会 山崎和子

私は昭和 19 年 2 月生まれ。ちょうど沖縄戦の真っ最中。はじめての子を父辰平は抱いてくれ、名前を「和子」とつけた。あの頃は平和を祈って「和子」の名前が多く、私の小学校のクラスにも 3 人はいたからだ。

父は、沖縄群島座間味島へ出陣。昭和 20 年 3 月 26 日戦死。

留守を守る母だけは産まれたばかりの私を育て食べていかねばならず、神明町の借家に住み近くの病人の世話をしたとか。その病人が結核だったため母も結核になり、天竜荘に入院、昭和 22 年 12 月 7 日死去。現在ならツ反（ツベルクリン反応）、BCG とかあって結核で死ぬ人は少ないが。そのため私も小学

校時代はツ反で二重発赤になり保健所へ呼ばれた。今は医学が進みありがたい世となった。

両親を亡くした私は母の実家で育てられた。叔父、叔母は新婚早々。祖母が早く亡くなり後妻に来たばあちゃんが怖い人で、言うことを聞かないと裏の松の木へしばるとか、おきゅうをすえるとか、顔もきつく、祖父も早く亡くなり後妻の婆さんの天下だった。

それで小学校入学時、今度は父の実家へやられた。父の実家は叔父が大工で一人で働いているだけ。祖母以下子供六人。そこへ私が加わり暮らしが大変。

私の両親の葬儀が父の実家で行われ、ちょうど近所の助産婦のおばちゃんが来ていて、私を見てこんなに小さいのに両親がいないなんてと思って「わしらん家へ来るかね」と言ってくれた。

次の日「おしん」みたいに小さい風呂敷包み一つを持ち一人っきりでおばちゃんの家に来たとか。

おばちゃんは東京で若い頃看護婦をしていて富士のお寺へお嫁に行き、息子さんが二人出来た時、住職が亡くなってしまい、掛川の田舎へ子供を連れて帰り助産婦を開業。ちょうど戦争が終わってあちこちでお産する人が増えて大繁盛。

私も女性でもおばちゃんみたいに職業を持ちたいと思い、高校卒業後県立保育専門学校へ通わせて頂く。以後ずっと保育士をやり、園長までやらせて頂くが、おばちゃんが弱くなり、仕事をやめおばちゃんの介護、99歳の長寿を全うされた。

私も人生最初は大変な暮らしだったが、後半は良い方々に巡り合い本当に感謝している。

今もウクライナの人達の悲惨な暮らしが起きている、どうか戦争はやめて!! 平和を祈っています!!

戦争の悲惨さを知り平和を願う

掛川市遺族会 平出芳枝

父は昭和20年6月17日沖縄で戦死しました。「近衛兵だで東京に居るとばっかり思っていたに」と祖母からよく聞かされました。白木の箱には遺骨は無く、白い紙に名前が書いてあり小石が一つ入っていました。3歳の私の記憶です。遺骨、遺品のない父の死を母、祖父母、妹弟はどんな気持ちで受け止めたのでしょうか。当時は名誉の戦死と言われましたが、名誉の死ではありません。父のいない寂しさからぬけだす努力を、祖父母に支えられ、母、妹と3人でし

ました。

6月23日沖縄玉砕の日、日本遺族会の主催で慰霊祭と平和行進が挙行されます。死を覚悟した父の気持ちを知りたくて、35歳から毎年参加しています(40回)。沖縄で父を亡くした遺児が全国から集まります。総理大臣も出席されて、毎年沖縄の事は常に思い考えていると述べて下さいますが、基地、辺野古問題など、沖縄県民を早く安心させて下さいと祈ります。

戦争当時女学生だった友人にどんな生活をしたのか教えて頂きました。

教科書は持たずに防災頭巾をかぶり、学校へ行っていろいろな作業し勉強はしません。食糧がなく、お弁当が無い人は外で過ごしていました。

ある方は、栄養失調で体調が悪い時、お父さんの出征中にお前を死なす訳には出来ない、力のつくようと玉子、おかゆを用意して看病してくれた、お陰で今生きていると。本当に強く賢い母でした。

「勝つまでは」と沢山の我慢もして過ごしました。今言える事は、近所の人達と助け合い暮らしたことは忘れていませんとも、語って下さいました。

時代も令和となり、戦後生れの多くなった今、戦争を日本の歴史としか知らない人々に、戦争の悲惨さ、怖さ、恐ろしさを伝える機会があれば参加させていただきます。

掛川市では、小学六年生に平和学習に使う「掛川市の平和と未来」、静岡県女性教職員の会小学支部戦争体験を語り継ぐ会「戦争を語る」の2冊が本屋さんにあります。参考になればと思います。

「従軍記録とその思い出」より抜粋

掛川市遺族会 宇田幹男

[駐蒙軍司令部へ転属]

昭和20年2月再び駐蒙軍司令部参謀部へ通信係将校として転任する。自分には余りにも過ぎた部隊と思ったが命令に従って転任した。仕事は通信、道路、給水と防空だった。この仕事は蒙疆^{もうきょう}全域(現中国内モンゴル自治区中央部及び山西省北部の地域)に及ぶもので大変な重責だった。幸いベテランの吉野軍属が補佐役にいたので、彼に教わりながら仕事についたが、最も気をつかったのは、矢野参謀長から命令書草案の認印を貰うことで、これはなかなか容易なことではなかった。参謀長の話では一線にいる者はそれなりに鍛えられているが、参謀部ではこういう時に使命感を植えつけるのだといわれた。成る程と思った。

防空面では防空演習を一度だけやり、飛行機で包頭^{ぼおとう}まで飛んで上空から視察

した。初めての飛行であり途中大きなエアポケットにあい怖かった。又20年8月に入ってからソ連軍が参戦して張家口の上空に飛来し、機銃掃射や空爆を受け露店広場の現地人に多くの犠牲者を出した。生々しい現場に側車をとばしそれなりに指示した。

終戦になってからは約20km離れた丸一陣地の警備部隊からの連絡で、佐藤参謀と兵一個分隊で現地にかけつけた。驚いたことに、ソ連軍の約50輛の機甲部隊が陣地の前面に戦車を並べて盛んに戦車砲を打ち込んでいた。山の稜線にどうにか登って見たが足許に落ちてくる砲弾が怖かった。この時は降伏のため白旗を掲げた尖兵隊を出したが銃撃されて交渉は出来なかったので、やむなく引き上げ、後に方面隊からの援護で飛行機からビラを撒いて連絡がとれた。しかし、ソ連軍の要求は全く無茶で「直ちに張家口に突入する。部隊を集結して武装解除に応じよ」とのことで、根本軍司令官は満州の二の舞はさせられないと、直ちに約3万人の居留民を撤退させることを指示した。大振りの雨の中、張家口駅に集まって来た者の整理に当たった。まさに阿鼻叫喚の修羅場の惨状だった。無蓋貨車にはみ出しずぶ濡れ、トラックに無理矢理押し込み動き出したがバウンドで転がり落ちる者もいた。しかし鉄道の橋梁が破壊され、工兵隊の救援で列車を進め八達嶺に差しかかった時、トンネル内で窒息する者もあったり、又一方トラック隊は河床路が洪水のために車のエンジンが止まり、徒歩で北京までやっとの思いで逃げ帰った日本人も沢山いたとのことだった。八路軍にも襲われたので可成りの犠牲者が出た。

司令部は最後に張家口の街に火をつけて撤退したが、この時は街のあちこちに火の手が上がっていた。

[北京に逃避行]

ひとまず北京に逃げ帰った居留民や軍属たちは公民館などの建物に入っていたが、現地人や朝鮮兵の暴動に襲われて荷物を取られたり、中には殺される者もあった。

軍の関係者は北京の駐留部隊に収容されたが、約2ヶ月間11月末までは長かった。この間復員業務を担当した。まんじりしない不安の日々を送り内地送還に努力をつづけた。

[出港準備]

大連港に向けて移動し、粗末な収容施設の中で数日すごして乗船の日を待った。出航の前夜予想しなかった出来事が起こった。体育館に先に収容されていた軍属たちが軍の幹部たちを連れ込んで抗議をしていた。その内容は、「軍人

が先に帰還することは許せない」と云うものであり凄い剣幕だった。中川輸送司令官（参謀長）木村副官ら上級幹部数名が話し合いに加わっていたが、解決の目途がつかないので呼び出された。恐ろしい剣幕で襲いかかった。この場へ自分を引き出した軍属側の親方が、かつての部下だった吉野軍属であった。体育館の壇上には沢山の遺骨の箱が並べてあり軍属は今にも組みつきそうな感じであった。

席に着いた瞬間、吉野軍属にいきなり嚇かされめんくらった。とてもかつての部下ではない。何の役にも立てないと思ったが、幸い夜が更けてしらじら明るくなり出航の時間も迫り、遂に納得してくれた。あれ程抵抗していた彼が少しずつ声をやわらげて最後は見送ってくれた。結局GHQの命令のようで日本の軍部はどうにもならないことだった。

[乗 船]

慌ただしく僅かな荷物を持って港に向かったが警備に当たっていた米兵に時計をとりあげられたり、荷物検査所で洋服等目ぼしい物をとられてしまい哀れなものだった。敗戦兵の惨めさである。

こうして乗船したが何と米軍上陸用舟艇（L S T）で炊事施設や便所が僅かしかなく、米飯は1日に1度で大変に難儀をした。船上での生活は約1週間の航海で、やがて上陸港の長崎に近づき南風岬は えみさきに上陸した。戦争の痛手を受けて来ただけに喜びはひとしお一入であった。生還の実感をかみしめた。敗戦のみじめさが日を追って強くなり先のことは神にまかせた。

[上 陸]

張家口を出てから約4ヶ月の脱出の旅で苦しんだが、やっとの思いで内地に着くことができた。日本は美しい。もう2度と戦場に引き出されることがないと思えば安心して気持ちがほぐれた。国破れて山河あり、心の中でつぶやいた。

上陸して早速消毒である。荷物は別室に運ばれたが身体は上半身が裸になり噴霧器で消毒液をかけられた。12月半ばの気温は冷たかったが我慢した。既に夕日が西の海にかたむいている。ここから宿舎に当てられる少年航空隊まで約4 kmの坂道を歩いた。兵営や兵舎の中は殺風景だがやはり日本の兵舎だ。疲れきった体はよく眠りについた。原爆の被害は目につかなかった。

平成 26 年 8 月 15 日 追悼のことば

掛川市遺族会 松永猛

私の父は昭和 19 年 2 月に、舞鶴海軍朝倉隊に入隊し、直ちにフィリピンのネグロス島に向いました。戦争末期のフィリピン戦は、レイテ、セブそし

て第3の激戦地としてネグロス島が挙げられています。私の父はその当時自動車の運転が出来たので、工兵隊に配属されたものと思います。ラバウル、ガダルカナル、サイパン戦で敗北し、フィリッピンまで追いつめられた日本軍は航空機、船、兵器も残り少なく食料の補給も途絶えて、戦死者よりも餓死者の方が多い所も有ったようです。最後は私の父も昭和20年9月に野戦病院で亡くなったそうです。

父は8人兄弟の長男で家には弟妹4人がおり、自分の子供も2人が残されました。長男5歳、二男の私は2歳でした。長男は体が弱く、不幸にもはしかに罹り、更に高熱のために髄膜炎となり、父と同じ昭和20年4月に亡くなりました。私も兄と同じ病気になりましたが、運良く助かりました。兄は来年は小学校に入学できると楽しみにしていたそうです。母はいつべんに夫と長男を亡くしました。どんなに悲しかった事でしょう。しかし、家の者にはつらい顔を見せたことはありませんでした。幸い祖父母が元気で私達を陰ひなたなく助けてくれたので、道もそれずに今日まで元気にやって来れたと思います。母は夫と長男の分まで長生きする事ができ、平成20年9月まで93歳と天寿を全うできました。私も父と兄の分まで、母に恩返しをしたいと精一杯頑張りました。私が今日あるのも肉親や親戚の方々や近所の皆様のお陰と感謝致しております。

今こうして幸せな生活を送られるのも、我が身を顧みず祖国の為、同胞の為と頑張ってくれた多くの御英霊のお陰であります。

皆様の気持ちを介し二度とあのような悲惨な戦争を起こしてはならないと、思いを新たに、平和な世界を築くよう努力することを、お誓い申し上げ追悼のことばと致します。

どうぞ安らかに眠りください。

平成25年8月15日 遺児の言葉

掛川市遺族会 名倉武雄

今年もまた暑い夏がやって来ました。

私の母は昨年8月、95歳で生涯を終え、34歳で戦死した父の元へ旅立ちました。

私が生まれた昭和16年10月、父は太平洋を「多分何も知らされないままに」南下、蒸し暑い船底で、海軍機関兵として黙々と働いていました。

その時母は24歳で、その後、一度だけ神奈川県横須賀へ寄港するので、家族で面会に来る様に連絡があり、当時3歳の姉と、1歳の私は母や祖母に連

れられ、父に会いに行った事になっていますが、全く覚えはありません。

母は 95 年の生涯の内、夫婦で暮らせたのはたった 3～4 年、70 年以上をお国の為、天皇陛下の為、家族の為に戦争未亡人となり、失った事になります。

父は、終戦の時には生存していて、その後オーストラリア軍の捕虜となり、赤道直下のブーゲンビル島の野戦病院で、赤痢・マラリア等の病気にかかり、死亡した事になっていますが、「捕虜は現地の兵隊の 30% のカロリー分しか食糧が与えられていなかった」との事実から、体力も弱り病死したものと思われる。

私は 10 年前、日本遺族会のお計らいにより、父の眠る戦地を訪ね、どんな所か確認する事が出来ました。

南方のジャングル地帯は、内陸部に病院を作るのは大変だったので、ほとんどは海岸近くに建てられ、当然衛生状態も悪かった様です。

記録によりますと、父の死亡したのは昭和 21 年 1 月、町内の戦地から帰られた浅岡さんから、父の死亡の知らせを受けたのが 2 月、横須賀町の発行した「広報」は翌年昭和 22 年 2 月、静岡県慰霊祭は 3 月に静岡市の臨濟寺で行われ、母は白木の箱を持ち帰り、町の合同葬は 3 月に執り行われました。

実に、死亡してから 1 年 2 ヶ月後の葬儀でした。

開戦間もない頃の戦死者は地元の英雄として、多くの人達にもてはやされ、これから戦地へ行く人の励ましともなっていました。敗戦後の実態は悲惨なものでした。

今回の太平洋戦争だけで、それも僅か 3 年 9 カ月の間に戦没者は 310 万人、うち南方での死者は 100 万人、特に戦争末期に死者が激増した、と云われております。

私達は太平洋戦争の遺児として生きて来ました。その中でも若い方の私が間もなく 72 歳です。日本は戦争を知らない人が殆どとなり、戦争の酷さや悲惨さも忘れられようとしています。今生きている私達は、先ず一人ひとりが、自分の考え方をしっかり持って、人を愛し、地域・国家を守る使命があると思えます。

最後に、私達の為に尊い命を落とされた英霊の方々が、安らかに眠り下さる事をお祈り申し上げると共に、永遠に戦争の無い、平和な日本を持続させる事をお誓いし、遺児の言葉と致します。